初期浮世草子　2

樗庵物語

付、好色浮世男・都名物男・小夜衣

古典文庫

初期浮世草子　2

樗乃露

付、好色浮世男・都名物男・小夜衣

古典文庫

古典文庫第五二三冊

平成二年六月二十日印刷発行　非売品

初期浮世草子
(二)

編者　吉田幸一
発行者　吉田幸一
印刷者　白橋印刷所

発行所　114
東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話〇三(九一〇)二七一七
振替口座東京九―一四五九七番

© KOTEN BUNKO, 1990. Printed in Japan

目次

凡例……三
梅のかほり　五巻五冊　貞享四年版……国立国会図書館蔵……五
好色浮世男　巻四、一冊　元禄二年版……一四九
宮古めい物男　下巻一冊　元禄二年版……一九五
江戸貞女小夜衣　五巻五冊　元禄二年版……二一三
書誌……三八七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

凡　例

一、所収本の翻刻にあたり、底本に忠実にとつとめたが、印刷上の都合で、大体次のようにした。

イ、漢字・仮名の別、漢字の異体・略体文字・合字の表記は、概ね現行の活字体に従った。但し、『梅のかほり』『小夜衣』における明らかな多用誤字（例、江符→江府）などは、下の正字に改めた。

仮名表記の「ミ」「ハ」「ニ」などは、そのまま用いた。また、捨仮名は原のままとした。

ロ、仮名遣い・清濁・振り仮名・踊り字・句読点など、底本のままとした。

ハ、挿絵には、順序番号をつけ、原本の所在箇所近くの組版に挿入した。

ニ、翻刻文の中には、すでに版行されている複製本との対照を考えて、すべてに底本の丁移りに、版心に施された丁付によって、丁数を記した。オ・ウは表・裏の略号。

ホ、原文の誤字・誤刻で、原字のままのこしたものには、（ママ）印をつけた。

『小夜衣』の如く、読点が皆無の文は読みに難いので、私意により句文に読点を施す換りに、その部分を一字あけた。

一、終りに、底本の翻刻を御許可下された国立国会図書館に対し、深謝する。

また、狩野文庫本については、先年、松野陽一氏にいろいろ御世話に相成り、校正では吉田榮司氏の助力を得た。ここに厚く御礼申し上げる。

平成二年三月

梅のかほり

貞享四年十一月刊

国立国会図書館蔵

きのふはけふの。むかし〳〵あつたと。うぶ子はふこも。今からさきの物がたりといへば。うなづくごときに。熊谷笠をかたふけ。或は二挺だちの櫓拍子を。からころひよんの一ふしに。浅草川の浪に浮れ。かの道にをもむくほどの人。此きみの御盛なるをしらぬはあらねど。やんごとなき。むらさきの御ゆかりなる御身の。かくうつりかハる世のならひとて。（一オ）うきふししげきかハ竹の。ながれをたてさせたまふ。こしかたのあはれさを。露しれる人もまたなく。浅草観世音の再来ならんなどいふ。いにしへもならぶかたなき。三がい松のきみ。また久州まつらがたへかげをかくされし。江戸町の對刄など。此里をさられし後は。三野の火もきえ。日本堤のけふりも絶はつる心地なりしに。（一ウ）

今このきみを。一座は勿論。ひとたひゑめる。かほばせに。百の媚あるを見るに。肝消魂とび。そのかミ名たかき御の字たちにも。よろづまさらせ給ふとばかり。ひとつざまにおもへるも。本意なきわざにのミ思ひしに。折しも。古たること。いまやう。かたのごとくの。わけしりなんどいふ人。からの山迹のことぐさによせて。すさみおかれしを〻（ママ）（二才）そとかたはしを見侍りしに。かのきミの。根本よねの元祖を。あらハしたまへるなれば。これぞ。この世のおもひでと。わりなく。ゆるされよといへど。わけの翁の云。かく筆にまかせるも。憚る所のあれば。白地に名をも顕しがたく。此道にいらん人の。悟道見性とのミおもふゆへ。漢皇色をおもんじて。傾国を思ふとかける。もろこし人の文に準へ（二ウ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

又はやつがれ。老ほれん後の。わかやき草なれば。人にまみゆべくもあらずと。ふかく匣の底に秘せられしを。予に是非と責られ。いなひがたくて

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞしる。

といふ。古哥を。表紙のうちにかき。冬ごもりと題せられて。つたへられしを。くり返すに。いとまもあらず（三才）難波の世ゝのをしへにも。人のために花をおれば。我袖まづ芳しゝ。ともきくなれは。分て五巻となし。今この花のひらくるを。梅の薫といふものならし

東陽幽叢拙氏

夢遊軒追序

（三ウ）

梅のかほり巻之一

目録

一　桜の馬場弓馬のさた
一　花見の亭御簾の追風の事
一　むすびの神の事付りおさきの御方袖のかほりの事
一　安達弁之介恋やミ并原田治郎左衛門分別の事
一　玉づさの巻付り四季のながうた
一　おさきの御方のはした女房あかしを角内かたらふ事付り明石了簡ちがひの事

（四才）

（白）（四ウ）

梅のかほり巻之一

さくらの馬場弓馬のさた

よつのうみたいらかに。波しづかにして。風えだをならさぬ御代なれば。天和にとしの名も。あらたまりぬるこのはるの。梅の色そひうぐひすのはつねをつぐるならひとて。さしいづる日ののどけさに地もうるほひをまし。士はいふにやおよぶ。耕に農こゝろのごとくにみのり。工あそぶにいとまを得ず。商家にぎハひにことぶき。民万歳をうたふ時にしあれば。やよひの花のあしたをのミ。まつ日もながしあしびきの。山をぞながめくらすにも。けふきさらぎのはじめつか

た。こゝに（五才）くにの守なりしめでたき御家のありしに。よろづ御心のまゝにわたらせたまへば。むさしの府にちかき野夫の地を。数万の坪もとめさせ。松のはやしに竹の垣。四壁をかろくしつらハせ。内の殿閣にハ七宝珠玉をちりばめ。花清宮のいにしへ江南の春をうつし。山水をのづからの景地なれば。鳥飼ざれとも。おしやりもめもむれゐ。かきねの草もえいづるも津のくむあしの沢辺のてい。いふも中〳〵あまりあり。またかたへにハ。八重ひとへ。やうきひ。きりがやつ。さま〳〵名あるさくらのなミ木をうへさせ。さくらの馬場となづけこれにも小殿を立させ。風流善尽美つくし。花見の亭といひな（五ウ）らハし御遊のたよりとなし給ふ。御下屋敷守とてかねて人をすえられ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb